

『妄妄録』における朱海の志怪観

尹 青 青

はじめに

朱海による『妄妄録』は清代に成立した志怪小説集である(1)。作者の朱海に関しては、自序から字は蕉圃、呉県(現江蘇省蘇州市吳中区・相城区)の出身であることは分かるが、それ以外は未詳である。この書物に関して周作人は「専ら鬼を語り、鬼の事情を知りたいものに大いに参考になることが重要であり、この類の資料は探し集めるのが難しいからこそ、貴重である」と同時に、「ふざけたところや罵言が多く、人を罵るために捏造した話がある」と賛否両論な評価を与えた(2)。管見の限り周作人の言説以外の議論は確認できず、まだ検討が十分であるとは考え難い(3)。小論はこの書物の序文、所収の説話、関連する言説を材料に、作者である朱海の志怪観について検討を行う。

一 序文を手掛かりに

この書物には作者である朱海の自序と葉世倬⁽⁴⁾による序文がある。示された時期の順序に従い、先ずは朱海の自序全編を確認してみよう。

私は家が没落して以来、隠遁しているような状態で、下級の官職にも就けなかった。家屋や田畑は勿論のこと、収集した図書や器物や画冊も、全て有力者に奪われた。家は壁しか残らず、憂鬱で気持ちは晴れず、毎日妻と苦しい生活の中で涙を流した。全く楽しみがないので、功名を求めて家を出た。数年の間、いかにも情けない小物らしく、人の幕下に付き従う内に、老境を迎え、病氣も憂いも多いまま、間もなく亡くなってしまったことを思った。ともに学び、ともに五陵を遊歴した若い頃の友人も、皆すっかり年老いて、兄弟の契りを結んだ時の金蘭譜も死者の名を記す過去帳となった。思いもかけなかったことに、癸丑（一七九三）年の冬、天はまた私を苦しめた。舟で洙溪河を行くと、夜中に風で転覆した。身の回りの物がなくなつた上に、船乗りと下男が三人も命を落とした。旅先で困り果て、疲労のせいで病み、苦難と憂慮で氣力を失い、借金を重ねた。杭州の宿で足を止め、たまたま空想を巡らせ、生計を考えようとしたら、鬼（のような人）に馬鹿にされた。運命の小僧は何の役にも立たない。（世の中の人々は）身なりが粗末であるのを見ると、貧しい鬼だと見なす。不満を酒で晴らそうとしても、時宜に合わなければ、人々は今度は酒の鬼だと騒ぐ。どうしようもなくなつて詩を詠じ、落ちぶれた中で、憂悶を晴らそうとしても、言葉は悲しく恨めしくなり、とやかく言うものが今度は苦しみの鬼だと笑い者にする。堂々とした七尺の体で、白日の下に身を置き、貧しいが病氣ではないとしても、誰かが「○○鬼」だとな付けると、人々は皆便乗する。もしもある人が立ち上がつて争い、異郷で落ちぶれている人のことを、荊軻や高漸離のような義を重んじる人が悲しみ嘆いているのであつて、立派な人だと言うならば、でたらめだと排斥さ

れないことはほぼまれである。そのため（人々は）男気と気概があつても發揮しようとせず、正しい意見があつても言おうとせず、功名と富貴を求めようとせず、眷属と従者のことを心から思おうとせず、琴棋詩酒を語ろうとせず、たまつた怒りを表出しようとしぬ。何かが言いたいならば、ただ鬼だけを語れば、鬼（のような人）に馬鹿にされずに済む。誰かと議論するのも、ただ鬼だけを語れば、完璧を求めるあまりの失敗を免れる。そこで蘇軾が黄州に左遷された時の故事を真似て、日々人に鬼の話をするように強い、決して生計を立てる努力はしなかつた。半年間、でたらめな話をでたらめに聞き、また以前聞いた話を思い出して、手あたり次第に書きとめて、『妄妄録』と名付けた。神仙の不思議な話は記載せず、ただ鬼の話だけを記載した。知識人が不遇ならば、その文章に神が宿つたとしても、鬼に化けるのにはかならないだろう。乾隆甲寅（一七九四）年の秋九月十六日、呉縣蕉圃の朱海が杭州城北の養行楼で書いた⁽⁵⁾。

整理すると、自分は貧乏で行き詰まり、鬼のような世間の人々は「貧しい鬼」、「酒の鬼」、「苦しみの鬼」だと自分の事を揶揄する。仮に自分の味方をしてくれる人間がいても、世間からは相手にされないだろう。世間の目を考える人と人間のやるようなことは全てやりたくてもやれない。ならば人間と無関係な鬼のことを語れば悩むこともないだろう。生活に苦しみ、世間から相手にされなかつたが故に、鬼を語らざるを得なかつたという調子で自らの不遇を描写し、鬼を語る理由を述べている。この書物のキーワードが「鬼」であることは明白である。

自序では朱海は自身の不遇に強い不満を抱き、その鬱憤を晴らすために「鬼」を語つたというような印象を与えると同時に、「戯文」（戯れに書いた文章）に見える側面もある。特に「点鬼簿」・「窮鬼」・「酒鬼」・「苦鬼」などの表現は、「鬼」を通して筆墨の遊戯をしているように見える。そうだとすると、自序全体が示した「自暴自棄になつて鬼を語るしかなかつた」という理屈は、表向き姿勢として後付けしたポーズであるとも捉えられよう。自序の最後で「知識人が不遇ならば、その文章に神が宿つたとしても、鬼に化けるのにはかならないだろう」と理由を挙げているが、「でたらめな話をでたらめに聞く」（原文「妄言妄聽」）からすると、作者である朱海の志怪観は袁枚の『子不

語』を連想させる遊戯性を重んじる一面があるかも知れない。

ではもう一編の序文ではどのように述べているのか、葉世倬による序を確認してみよう。

唐から学問のある人は小説を作るのを好み、後に人々は競つてその真似をした。(それらのものは)人を笑わせたり談笑させたり、感激の涙にむせせせたりして、中では神仙や鬼怪の事柄も述べたりしたが、あろうことか一つの学説を立てるにも、一つの著作を書くにも、世人を救済する心がなければ、精巧であつても崇高ではないことを知らなかった。私の友人である朱海は成年の男伊達で、壮年で郷愁に駆られた。詩と酒を以て生活し、哀愁に満ちた心に溜まる鬱憤の気を払い、文章を頼りに遊戯を行い、世の中の浅薄な見方を呼び覚まそうとした。

書生は運命に恵まれず、金銭とゆかりを持つのを恥じとした。名士は優雅で優れていて、その身で禍根を植えるのを恐れなかった。生涯の抱負は実現せず、ただ慈悲の心を残した。そこで見聞を十二卷の書物に集め、『妄妄録』と名付けた。型にとられない文章で、戒めに感奮することを託す志こころだった。ほんやり影も形も見えなくとも、幻は即ち真となり、世の中の善し悪しを探求して自ら見通した。(中には)隣れむ心を全て捨てた魑魅魍魎がいれば、時に口を開いて笑う牛鬼蛇神もいるが、その中の因果応報(による報い)は一度も間違わなかった。竺道生が説法したのにも劣らず、石を領かせるのに十分である。早く刊行して広く伝え、憧れの境界に辿りつくのは可能だと示し、改心するのも遅くないのを理解させるべきである。でたらめな言葉だと言つて、小説家(の言葉)、『曝簷』⁽⁶⁾や噂話と同類に並べないでくれ。これを以て序文とする。道光二(一八二二)年の夏、撫閩使者の同郷の後輩葉世倬が謹んで書いた(7)。

ここでは唐から小説は多く書かれたが、それらのものは「世人を救済する心がなければ、精巧であつても崇高ではない」という批判とは対照的に、この書物を高く評価している。その理由として、作者である朱海には慈悲の心があり、世の中の浅薄な見方を呼び覚まそうとしていると言う。序文として先輩の人柄を褒め称えるのは置いておいて、

この書物が悪書扱いされる恐れを念頭に、道徳的な方向性を提示した働きが垣間見える。その方向性として、この書物の「因果応報」に関する部分は適切であり、世の中に戒めとしての教えを広げる働きがあるとしている。朱海の不遇や周作人が指摘する彼が他人をあげつらうことにも一応触れるが、その部分も肯定的な評価の一環として提示している(8)。

無論葉世倬の序文は朱海の観念を直接表す材料ではないが、書物全体の序として自序の前に置かれているため、自序より先に読者に読まれるわけである。故に葉世倬の序文による評価はある種の認識を読者に提示することになるだろう。その認識とは前述したこの書物の「因果応報」に関する戒めとして高評価した価値の提示である。朱海の自序では「鬼」がこの書物の主題であることは明白だが、「因果応報」に関する戒めを匂わせる部分は見当たらない。しかしこの書物には説話の題目からも、説話の内容からも、「因果応報」を主題とするものが複数あることも明白である。葉世倬が提示した「因果応報」に関する認識は作者の朱海も意識したものなのか、それとも後付けした道徳的な方向性に過ぎないのか、これらの説話を手掛かりに、検討を行いたい。

二 「因果応報」に対する観点

『妄安録』は専ら「鬼」を主題とする説話を収録したと言うが、説話に鬼が登場するか否かにかかわらず、「因果応報」を話の主題としていていると思われる説話が複数存在する。筆者が整理したところ、以下二十二則がこの条件を満たしている。

- 卷一 「欺凌孤寡」、「討命鬼」、「怨鬼託生」
- 卷二 「口業債」、「宿冤索命」
- 卷三 「借軀託生」

卷四 「殺業果報」、「果業報応」

卷五 「兄敗弟奸」、「会場孽報」

卷六 「魔餐孽種」、「尤太史著伝奇削祿」

卷七 「荼毒慘報」、「猫索婢命」、「占墳奇報」

卷八 「鬼仇訐私」

卷九 「溺器上観書削祿」、「陰惡墮大」

卷十 「悍婦孽報」、「殺頭鬼」

卷十一 「褻経削祿」

卷十二 「良友規箴」

見逃した可能性はあるが、差し当たりこの二十二則の説話を考察対象にしたい。ただ巻六の「魔餐孽種」と巻十の「殺頭鬼」は他の書物から説話を借りたと明示しているため、この二則に関する検討は次節で改め、本節では内容のみを簡略に整理する。

(一) 「欺凌孤寡」

無錫の秀才鄒夢蘭は兄が早死になった後、兄嫁と姪を虐め、その家財の大半をまきあげた。ある日兄が魚の骨を手にとって、「お前の行いは非道だ、そのうち喉が詰まって死ぬぞ」と言うのを夢で見たので、それから一切魚を食べなかつた。後に提督学政（督学使者とも、清の官名）の耿が常州に派遣され、誰かに耳元で「鄒夢蘭は孤児と寡婦を虐めている」と言うのを聞いたが、周りには人もいなければ、夢のことでもなかつた。そこで耿は詳細を調べ、鄒夢蘭の功名を取り下げて、杖罪を下し、彼が横領した財産を元へ返した。鄒夢蘭は怒りのあまりに死んだという内容である。

罪を犯した者に罰が当たるといった「因果応報」を唱える内容ではある。ただ前半で提示した魚を食べて喉が詰まって死ぬ云々の部分は結果的に最後の報いとは直接関係せず、登場人物の鰯も魚の骨で死んだとは述べていない。この部分は説話の滑稽さを増やしているように見える。

(二) 「討命鬼」

王四という者がいて、「転身王」(体の向きを変える王さん、または王様という意味)と呼ばれていた。人が彼から金銭を借りたいと頼むといつもよく承知したが、一回も実現しなかった。江蘇の風習で事が果たされないことを「黄」と言い、王四は体の向きを変えた途端に前言撤回するので、「王」と同音である「黄」で彼の苗字を呼んだ。嘗て王四の親族が彼の商売がうまいのを羨み、遠くから王四を頼りに来て商売を任せた。王四はその親族の元手で生じた利益を全て着服し、損をした分は全て親族が担うようにさせた。後にその親族は全財産をなくし、悲しみのあまりに亡くなった。ある日、王四は突然頭を地に打ち付けてその親族の名を叫び、「私はあなたのお金を騙し取ったが、私の命を狙うまではないだろう」とぶつぶつ独り言を言った。そして自分で首を締めて死んだという内容である。説話の末尾には朱海のコメントがある。

ああ、金銭は命と繋がるのだ、金銭を誤魔化して我がものにしてはならない(9)。

人の金銭を騙し取った者に罰が当たるといふ勸善懲惡の戒めを唱える内容として見なせる。一方説話の冒頭で提示した「転身王」という呼び名の由来や、「王」と「黄」の下りは「因果応報」とは無関係の、笑いの要素として目立つ印象を残す。

(三) 「怨鬼託生」

張邦弼によると、安徽に陸という奸悪且つ横暴な人がいて、その近所の鄭の家を横領し、元のものは庭の一本の黄色い楊樹しか残さなかった。晩年にやっと息子が生まれたがその息子は喋ることができなかった。ある日息子が庭で遊んでいると、その楊樹を指で指しながら「樹よ、まだあったのか」と喋った。陸家のものは驚いたが、息子はまた黙り、あらゆる方法で喋らせても喋らなかつた。息子は成年すると酒色に溺れ、如何なることも好き放題にやり、家の財産を蕩尽して死んだ。恐らく鄭の鬼がその息子に憑依したのであろうという内容である。

家を横領された鄭が陸の息子に憑依し、惨めな結末を迎えさせたという趣旨の話で、比較的多くの描写を報いの因果関係と登場人物に罰が当たる場面に注ぎ、「因果応報」を主題としているように見える。

(四) 「口業債」

太史の潘奕藻は以下の話を私に伝えた。先輩の進士に我思永という者がいて、よく自分の書物で先人を中傷し、中でも特に明の周子義を誹った。後に発熱し、夢の中で王居のような場所に辿り、そこには周子義のような者が座っていた。我思永は百回も叩頭し許しを願った。座った者は「我の三生の口の業は今既に償った」と言い、手下に我思永を送り返らせた。そこで我思永は目が覚めたという内容である。

説話では直接登場人物の我に罰が当たったわけではないが、朱海は末尾に以下のようにコメントしている。

太史が私にこの話をしたのは、恐らくは婉曲に口を慎むように警告しているのであろう。だが私は固く口を慎むことができず、時には笑いを堪え切れない。どうすればいいのだろうか⁽¹⁰⁾。

知人が自分に口を慎むよう諫めるために語ったと言うが、朱海はその言葉を素直に受け入れたわけではなさそうである。口を慎むことができないのはやむを得ないことであり、自分も仕方ないのだと、ある意味開き直りに見える。

朱海は讓歩したような言葉で述べているが、ここでは因果応報を懸念するよりは遙かに笑いが優位に立っているのである。

〔五〕「宿冤索命」

蘇州の史家巷の蔣申吉の息子は徐氏を娶り、息子の夫婦の仲は良かった。ある日徐氏は夫に酒を勧め、「私の積年の恨みは既に至り、その勢いを止めることはもはや不可能です。この酒を飲んでお別れとして、私のことを忘れてください」と言つて慟哭した。蔣の息子が徐氏を慰めると、徐氏は急に「お前は萬歴十二（一五八四）年に、二人で計らつて私を陰光書楼で殺したのを覚えてるか」と叫んだ。そして自分で自分の顔を叩き、ハサミで体を刺した。発音のなまりは山東省の人に似ていた。蔣家の人が跪いて頼んでも結局は事情が分からなかった。そこで吉祥庵の有徳の高僧蓮台を呼んだ。蓮台が来ると、徐氏は恭しく恐れ慚む様で、「禿げ頭（原文「禿奴」）は恐ろしい、帰らせて、帰らせて」と言つた。蓮台が部屋から出ていくと、徐氏はまた「お前の嫁の部屋に朝晩坊主頭（原文「和尚」）がいてたまるか」と罵つた。蓮台は「これは前世の業だ、二百年経つてやっと尋ねた。時間が経てば経つほどその恨みは深くなり、報いも早まる。わしにはなにもできん」と言つていとまを告げた。蓮台が帰ると、徐氏は再びハサミで体を刺し、体中傷だらけで死んだ。これは先輩の訪祖靜が話したことで、乾隆二十九（一七六四）年のことだつたという内容である。

二百年も前の業によつて裁きが下されたという趣旨だが、読者の関心を掴むのは「因果応報」に関する部分より、むしろ僧を「禿げ頭」や「坊主頭」と呼ぶ部分であろう。「因果応報」を体現する内容ではあるが、僧を罵る描写の部分が目立ち、滑稽な印象を与える。

〔六〕「借軀託生」

ある金持ちは人に物を抵当とし金を貸して利息を取り、かなり搾取した。六十を超えて妻と妾を亡くし、幼い子が

いたが病気で瀕死の状態だった。ある日の夜、人が金を持って来て、抵当を解消しに来たが、金持ちは夜遅くに門を叩いたことを怒った。その人は「夜が明けて私の物が戻らず、元手を失ったら、俺はありったけの物を持ち出してでも金を集めて期限内に間に合わせる」と言った。金持ちは失意のさまに、子供が亡くなってしまつと、いくら金があつても無駄だと思い、自分の搾取により家産をなくした人が多くいるのを後悔した。そこで翌日抵当にした田畑や身の回りものを全て返し、債券も全て燃やした。後に子供は病死し、金持ちは遺体を撫でながら涙を零していると、以前負債していた人が扉を押し開けて入り、「この借りを促された者を悲しまないでください。借りを償うと自然に死ぬのです。あなたに後継ぎがないことを念じ、債券を燃やした高德に感服して、あなたの子になって、晩年を世話します」と言つて消えた。そこで子供は再び目を覚まし病氣も治つた。その負債した人の家を訪ねると、その人はその夜に死んでいた、子供の体を借りて転生したことを知つたという内容である。そして末尾には以下のコメントがある。

これは福建南平の姚字信・字は格亭が私に教えた話である。ああ、恨みを持つのも恩恵を施すのも、全ては人自身によるのだ。ちよつとの後悔で、既に絶つた後継ぎを蘇らせた。借りを催促すると子は去り、借りを返すと子は戻る、これも己の身によるのだ。因によつて果が生まれ、善悪の報いは直ちに影響するのだ。まことである(11)。

金持ちが改心したため、その息子は蘇つたという趣旨と、最後の警告的なコメントは、「因果応報」に関する戒めとして提示しているように見える。

(七) 「殺業果報」

蘇州で飛ぶ虫が人を襲うという噂が立ち、人々は警戒して門を閉じて、子供たちはクツワムシや蛾を目にすると大

泣きした。老婆の張がいて、妾が産み遺した十歳の息子の世話をしていたが、ある日息子は蝻螂を見て、痙攣して死んだ。老婆は恨み、毎日蝻螂を購入して叩き殺して子供を悼んだ。ある日老婆がまた数百の蝻螂を買い籠の中に貯めると、籠の中から子供の泣き声が聞こえた。老婆は驚いで籠の中を確かめると、息子が姿を現して、「蝻螂を殺さないでくれ。僕は良く虫や蟻を殺して命を損なつた。その上母は息子が亡くなつたせいで、蝻螂を萬匹以上も殺した。その罪は美に深く、冥界の長は僕を五百回蝻螂に生まれ変わらせることにした」と言い、老婆の服を引つ張つて号泣した。老婆が手で触ると、一匹の蝻螂が服の上について、首を曲げて見詰めていただけだつたという内容である。蝻螂を大量に殺めたのが因として、息子が死んだ後五百回蝻螂に生まれ変わる果に繋がつたという趣旨である。命を大事にしなければならないという戒めとして見なせる。

(八) 「果業報応」

凡そ命が一番重いものであり、全ての命は死後鬼にならなければ妖になるのであろう。呉江に人の言葉を喋るハツカチヨウを飼う人がいた。そのハツカチヨウは猫に食われたが、ある日その猫は人の言葉で「命を渡せ」と言い、高いところから飛び降りて死んだ。蘇州西園の方生池に豚がいて、嘗て壁の穴を通して隣に走り、その雌豚と交尾した。後に隣の人はその豚を盗んで屠殺した。その人には八歳の子供がいたが、ある日突然痙攣して豚の鳴声を出して、三日で死んだ。崑山の楊少迂は蟋蟀を戦わせるのが好きで、いつも負けた蟋蟀を叩き殺した。ある夜石段の下から蟋蟀の音が聞こえたので火を付けて捕まえようとすると、突然数百の蟋蟀が現れて彼の体に噛みついた。追い払っても蟋蟀は退かず、楊は大声で叫んだ。家の人が見に来ると、蟋蟀など一匹もいなかった。その夜中楊は全身に疥癬ができ、数日で潰爛して死んだという内容である。末尾に以下のようなコメントがある。

業による報いは、昆虫や禽獣であっても、鬼となつて命を取るのだ。『文帝陰隲文』には蟻を助けて壮元になつた話があり、そして歩く時は常に蟻や虫を見て、注意しなければいけないと言つた。私の幼い頃を思い出す

と、蚊が酷く集まる時、いつも松脂を燃やして（蚊を）数多く焼き殺した。恐らく福と禄は全て取り除かれた上なおかつ罪が余った。今は落ちぶれて志を得ず、すでに罰を受けた。これ以上どうやって懺悔すればいいのだろうか⁽¹²⁾。

細かく分ければ三つの話になるが、いずれも全ての生き物の命は貴重であり、禽獣昆虫でも死後は鬼やあやかしになつて祟るという趣旨の話である。末尾で自分も蚊を大量に殺したので、今このように落ちぶれた生活を送ることを懺悔しているとコメントしたのは、警告として見なせるだろう。ただ猫が高所から落ちて死ぬ・痙攣して豚の泣き声を出す・全身に疥癬ができるというのは、「因果応報」による相応な代価を払ったことに見なせる一方、やはり滑稽な印象を与える。

(九) 「兄敗弟奸」

ある弟は幼い頃兄嫁に親しくしてもらい、しょっちゅう兄嫁の閨房に出入りした。兄が死んだ後、弟も成年したので、兄嫁は嫌疑を避けるため、母親の所でしか弟と会わなかった。ある日弟は酒に酔い兄嫁の閨房に入り、寝台で横になり、兄嫁に手を出そうとした。すると灯火は急に暗く緑色になり、兄が寝台の隅に座っているのを目にした。弟と兄嫁は大驚きして、家の人も騒がれて見に来たので、弟の思は上手くいかなかった。後に弟と兄嫁は相次いで死んだ。一説によると、ある者甲が兄嫁を寝取つて、乱に会つた。その乱は「赤い帳の中、無限の温情で兄嫁を呼ぶ」(原文「紅錦帳中無限恩情呼嫂嫂」と書き、その者に合わせさせた。甲は驚き恐れて話せなかった。すると乱は「黄泉への道、兄に合わせる顔はあるのか」(原文「黄泉路上有何面目見哥哥」と書いたという内容である。そして末尾にもコメントが書かれている。

人が隠して内密にしても、鬼神には知らない事はない。恐れなければならぬ⁽¹³⁾。

道徳に背くことはしてはいけないという戒めの内容ではあるが、前半の話よりは後半の乱がよこした言葉が比較的
に印象深く、滑稽である。その二句の乱文は聞いた物を書き写したのか、それとも朱海自身によるものかは判断でき
ないが、筆墨の遊戯であるように見える。

(十) 「会場孽報」

同郷のある者(某)は十二歳で科挙に合格し、十六歳に郷試に推薦され、才色兼備で人に慕われ、ある金持ちの家
に婿入りした。その家は某を偏愛し、相婿と同じ私塾に通わせた。相婿は十五歳で美人のような容姿をして、某は酒
の場で何度も相婿をからかった。相婿は腹を立てたが金持ちの家が某を重視しているので我慢した。某は誘うことが
できると思い、ある日相婿が酒に酔って寝ている時、服を脱がして猥褻な行爲をした。相婿が目覚めると、怒りの
あまりに天台山(現浙江省天台県)に逃げて出家した。家の人が彼を見つけたが、死んでも帰らないと言い、暫くし
て寺の中で円寂した。後に両親は事情を知ったが、体面を重んじ公にしなかつた。某が会試に参加した時、同じ私塾
に通つた頃のように相婿を目にしたので、大喜びで相婿が既に死んだことを忘れた。そして某は再び言葉で相婿をか
らかい、「弥子瑕の妻と子路の妻は姉妹だ」¹⁴と言ひ、この二句を答案用紙に大きく書いた。後数回科挙に参加した
時、異状を目にしたので、三回の郷試を終えることができなかつた。幸い若い頃科挙に合格したので、四十の年で既
に知県になつた。報いが来ると、急に痙攣して死んだという内容である。

男色で罪を犯した某に最終的に罰が当たる話だが、他の説話に比べると聊か大雑把な印象を与える。某と相婿のや
り取りの描写は緻密だが、それに比べると「因果応報」に関する部分があまりにも簡略であるように見える。他の説
話のように具体的な報いの描写がなければ、最後は「報いが来て、痙攣して死んだ」のみで終わっている。話の重心
は「因果応報」に関する戒めより、登場人物のやり取りに置かれているように見える。そして『孟子』から引用した
言葉の部分も、前で挙げた「兄敗弟奸」のように、筆墨の遊戯に見える。

〔十一〕「魔餐孽種」

上天竺（山、または寺の名）の一人の僧侶は冥界で、魔が人を食うのを目にして、どのような位に立つ人がどのような食べられ方をしたのかを現世の官吏に伝え諫めたという内容である。話自体因果応報を主題にしているのは確かだが、この説話は他の書物から借りたものであるため、次節で改める。

〔十二〕「尤太史著伝奇削録」

作者である朱海は筆墨の遊戯を好み、嘗て『鞞燕圓伝奇』という淫靡な内容の書物を書いたので、親族である彭希涑が同郷の尤侗を例に挙げて、尤侗の才能でさえ、淫靡な言葉を残したせいで、その罪を因果に官途では不遇し、子孫も報われなかったと言ひ、彼を批判したという自身の体験談である。末尾で朱海は以下のように述べている。

「彭希涑は）……西堂太史（尤侗）の修養と才徳でさえ、北京で落ちぶれ、子孫も繁栄しなかったのを免れなかつた。吾輩たちは恐れなくてはならない」と言つた。昔の忠告を思い出したので、皆と共有したい⁽¹⁵⁾。

「口業債」と似ていて、知人が自分を諫めた話であると朱海は述べている。ここで言う「昔の忠告」とは、同じく彭希涑によつて数回警告されたのか、それとも「口業債」で挙げた潘奕藻のような別人によるものかは分からないが、「口業債」の末尾では自分は笑いを堪えられないので仕方ないという調子で述べているのに比べると、この場合は大人しい調子になっているように見える。

〔十三〕「荼毒慘報」

陝西省白水県の某の妻が亡くなり、幼い子と娘を残した。某は梁氏を後妻にもらつたが、梁氏は酷くその子と娘を虐めた。ある日梁氏が化粧を終えると、後ろに眉をひそめて涙を零す婦人がいたので、驚いて発狂した。そして自ら

「このあばずれ、何故蛇と蠍のように悪辣で、私の児女を虐めるのか」と罵り、皆これは某の亡くなった妻の鬼が憑依したのだと悟った。それから梁氏は気が狂い、常にその児女に自分を叩かせたり、錐で自分を刺したりした。翌年鉄筋を焼いて自分の陰部に入れて死んだという内容である。

この説話も「怨鬼託生」のように、比較的に報いの因果関係と登場人物に罰が当たたる場面を詳しく描写し、「因果応報」の主題を表現しているように見える。

(十四) 「猫索婢命」

王興仲の下女は狡猾で、いつも魚を盗み食いついて猫のせいにした。王家の人は本当のことを知らず猫を殺した。以後下女は常にぼんやり猫に手足や顔を噛まれる幻を目にし、時々たわごとを口にして、猫に命を狙われるような様子だった。暫く経つて下女は真実を語ったという内容である。

他の説話に比べると「因果応報」による報いは比較的に軽く見える一方、話の展開も淡泊であり、前述した滑稽さが目立つ説話や、筆墨の遊戯が目立つ説話程印象深い部分はない。

(十五) 「占墳奇報」

ある者は風水師の話を信じて、古い墓を荒した後その中の遺骨を捨てて、自分の両親の遺骨を埋葬した。それで大金持ちになれると信じて、東洋に商売をしに行ったが、台風に襲われ、数年間島で流浪してやっと地元に戻った。その者が出航したばかりの頃、ある日急に家に帰り、「自分の荷物は盗まれ、帰れなかったので海で強盗になって人を殺した。今は名前や身元がばれたので間もなく眷属を捕まえにくるだろう。皆早く逃げてくれ」と言い残して去った。家の人は驚いて一夜で全員逃げた。翌日隣人が昼になっても門が閉じていたので、中に入って声をかけると、誰もいなかったのを不思議に思い、地方の役人に通報した。後にその家は封鎖されたが、親族は恐れて誰も声を挙げなかった。後に東洋に出たその者が實際里帰りし、家が封鎖されたのを見て隣人に事情を聴くと、家の人はとつくの昔

に行方をくらましたことを知った。その者は役人に頼み家を開放して、親族から家の物を取り戻したが、その大半は既になくなり、残った物もほぼ壊れていた。二年後その者が鎮江を渡ると、人の下女になっていた妻と会い、詳しい事情を知った。結局苦勞して彷徨って、兒女も何処に行つたか分からなかつた。その者が墓を荒したことを知る人は、鬼による報いだと悟つたという内容である。

この説話も描写の重心を報いの因果関係と登場人物に罰が当たる場面に置き、「因果応報」を主題にしているように見える。

〔十六〕「鬼仇訐私」

昔従兄の陳初哲から聞いた話によると、趙延洪という豪快で悪を憎む者がいた。隣人の婦人が少年とふざけているのを見て、急いでその夫に通報した。夫は証拠をつかみ、遠出するように偽り、少年が婦人の寝室に入るのを待ち伏せして二人を殺した。その後自首したが、法律によつて無罪にされた。半年後、趙は突然発狂して、隣人の婦人の口調で「命を渡せ」と言い、刀で自分を斬ろうとした。家の人は必死に彼を助けようとしたが、結局は舌を嚙んで死んだという内容である。そして末尾に朱海はこのようにコメントしている。

女性の居室のことをこそこそ言うのは、既に陰徳を損なつた。況して隣人の婦人に姦通沙汰があつても、親族が刑を実行するべきでない。にわかには関係ない話を以て、関係のない人を死なせてしまったのは、どういふ魂胆だ。彷徨う亡霊に崇られたのも、おそらくは自分で犯した罪のせいであろう〔16〕。

題名が「他人の私事を暴くと鬼の恨みを買う」であるのと、朱海のコメントにより、「因果応報」に紐づけて、他人の過失、特に他の家の女性のことを責めることはしない方が良いという警告を提示しているように見える。

(十七) 「溺器上観書削録」

山西省の劉戡は少年時代に神童と見なされ、九歳で県の学校に入ったが、中年になっても出世できなかった。「祖先は善い行いをしたのに、どうやら子孫の出世には影響はしないようだ」のようなことを口にして、自分の才能を負した。すると亡くなった父が現れて、「お前は本来高官になるはずだったが、便所で書物を読んでいただけろう。そのせいで聖賢を冒瀆したため、福祿が削られた。杭州の余太史もこの罪を犯したが、幸い元々福命が高く、辛うじて田舎の役人を維持した。これ以上愚痴を言うな、罪がもっと深くなるぞ」と言って消えた。昨年劉が余太史を探し尋ねると、本当に余は便所で書物を読んでいたことを知り、泣いて去ったという内容である。そして末尾には朱海がコメントを残している。

私は読書に夢中になった時、便所に行きたくなると、書物を持ちながら行った。自分の福命はどうなのだろう、残された罪を全て消し去ることはできるのか、不安で仕方ない(17)。

便所で読書することが經典を汚すことになり、それによる「因果応報」の話だが、話の内容と朱海のコメントの滑稽さが目立つ印象を与える。

(十八) 「陰悪随犬」

親族の陶澧から聞いた話として、ある者(某)は生前家境に恵まれ、素行が良い人だと思われていたが、死後某は二人の役人に押さえられて息子の夢の中に現れた。そして自分は日頃から何一つ善行を行ったことがないため、閻魔王によって隣人の家に犬として生まれ変わる事になった。その犬の色は黄色で足は白いと言う。息子に金銭を惜しまず、多く善行を行って、自分の罪を贖うと同時に、息子の福命にもなるのだと言い伝えた。後に息子は隣人の家に本当にそのような犬がいるのを目にして、その犬をもらって飼った。その犬は終始吠えることはせず、生前の過ちを

悔やむようだったという内容である。そしてその後は以下のコメントがある。

ああ、(悟るのが) あまりにも遅いのだ。耳が長く生えず、体が毛に覆われていない時、何故善行を積むことを考えなかったのか⁽¹⁸⁾。

この説話も比較的単純に「因果応報」の主題を反映し勸善懲惡を唱えているように見える。

(十九) 「悍婦孽報」

福州に李二という者がいて、妻の張氏は気性が荒く残酷だった。李二は薄情で結構金を貯めて、家には下女が数人いたが、張氏は彼女らをいつも痛めつけた。李二が二人の下女を寵愛していると疑い、張氏はその二人の下女の陰部を猛烈に叩いたり、お粥しか食べさせなかつたりした。二人の下女は逃げようとしたが、張氏に鎖で束縛され、相次いで虐待されて死んだ。間もなく張氏は情人が遠くへ行つたので、恋しいで病氣になり、下女の二人が命を取りに来たのをほんやり見て死んだ。数年後張氏は李二の夢に現れ、「私は下女に訴えられ、閻魔王は私を牛に生まれ変わらせた。明日市場に牛を売る者が来る。その牛は首に白い首輪をしている。その牛を買って私が殺されて食べられるのを救ってくれ。買わないとお前を噛み殺すぞ」と言った。翌日李二は市場で本当にそのような牛を見かけたが、買わずにいると、牛は怒鳴りながら李二を追つた。李二は怖くてその牛を買い、家の畑で放牧し、耕すことはさせなかつた。牛はよく隣の家に行つてその牛と交尾した。そして食事は必ず米を食べた。草をあげても、家具や飯碗を踏み潰すだけだった。隣人に李二の薄情を恨む人がいて、こっそり毒を牛に飲ませた。牛が死んだ後、李二が草で埋葬すると、隣人は牛を盗んでその皮を剥いだという内容である。そしてこのようにコメントが残されている。

ああ、死んで畜生道に墮ちても、惡を押し通して改悛しなければ、最後は屠殺されて刈られる惨状を免れな

い。後悔せず恐れなくてはならない(19)。

悪事を働くと畜生道に堕ちてしまい、それでも改心しなければ惨めな結末を迎えるという「因果応報」に関する戒めのコメントである。一方張氏が転生した牛の描写はやはり滑稽で印象深い。

(二十一) 「殺頭鬼」

刑部の獄卒だった楊七は山東の人参泥棒と親しく、人参泥棒は悪事がばれて死刑を前に人参と金で楊七を買収し、自分の頭を縫って納棺するように約束してもらった。だが楊七は約束を破り、肺病には人の血を付けた饅頭が効くというので、人参泥棒の血を取り、帰って親族に渡した。家に着くと、楊七は両手で自分の首を絞め、大声で「俺の血を返せ、俺の金を返せ」と叫び、間もなく首をへし折って死んだという内容である。この説話も他の書物から借りた説話であり、詳細は次節に譲る。

(二十二) 「褻経削祿」

徐本敬は謎かけ言葉を作って經典を冒読するのを好んだが、後に子を残さず早死になり、その後も報いを受けた。彼の妻は子孫がないことに悩まされ、自決しようと悩んだが、ある日彼女の前に徐本敬の鬼が現れて、「私は名を轟かせ、高い位に立つはずだったが、聖經を冒読したため福祿は全て取り除かれ、まだ天罰が残されている。私が謎かけ言葉を作り(經典を冒読したので)、冥王は私の子孫を絶った。幸い祖先が陰徳を積まされ、(冥王は)家族を断ち切らず、私の弟には子ができるのだ。その子をよく育て、悲しまないでくれ」と言い残して消えた。翌年彼の弟に双子が生まれ、その一人を養子にしたという内容である。その後以下のようなコメントがある。

ああ、經典を冒読した冥界の罰がこれほど重いとは。私は嘗て幼少期に四書の文を集め、戯れに男女の同居の

文を作ったが、即ちこの罪状である。(今まで)祖先の功績を喪失し、千里を流浪し、辛い目にたつぷり遭い、ことがうまく運ばず志を得ず、功名もただ人に地方を治めるのを譲り、借金に頼つて生活をしたのは、自業自得ではないか。それでも目に一丁字もない子がいるのは、恐らくはまだ先人の陰徳があり、その子孫を絶たないからである。後悔さきに立たず、部屋の方に向けて涙を零した(20)。

自分が生活に苦労したのも、それでも子を授かったのも、「因果応報」であるという趣旨のコメントである。ここでは戯れて經典を侮辱してはいけないという戒めを示しているように見える。同じく自身の反省に見える部分は、「口業債」でのコメントが聞く耳を持たないように見えるのと、「尤太史著伝奇削祿」でのコメントが大人しい調子になつているように見えるのと、「溺器上観書削祿」でのコメントが如何にも滑稽だったのとを比べると、この場合は真摯に後悔しているようにも見える。

(二十二) 「良友規箴」

最後の「良友規箴」はこの書物の最後の一則であり、その全体を示す。

先輩の張梓(字は瞻園)は上海の名士であり、百家の書道に長けている。彼の隸書は専ら曹全碑に打ち込み、世間に特に重視された。若い頃嘗て『齊東野語筆記』と『衢談巷説』を書いた。ある日彼が出かけると、旧友の李縉章が突然挨拶に参上した。(李縉章は)直ちに書房へ入り、張梓の書の表に以下の言葉を書いた、「奇談を借りて因果応報を語るのに、人を罵ることはするな。拔舌地獄があり、君子は刑を憚つて法を守るべきだ」と。そして忽ち去つた。当時李縉章の墓は既に木に取り囲まれていた。(張梓が)帰宅すると、しもべは(李縉章が書いた)文句を以て彼に報告した。(張梓は)大いに驚き、見ると墨の痕跡は薄いが筆跡は鮮明だった。良友がこれを以て自分を諫めたのだと知った。(自分は)聞いた話を記録しただけだが、恐らく既にうっかり口業を犯し

たと思い、その原稿を燃やした。私の先人と張氏の先人はいとこ関係で、(私は)ご子息の張黙(字は謹堂)と特に仲が良い。(張黙は)私が『妄妄録』を書いたのを耳にして、前の話を手紙で私に教えて諫めた。人を大事にするには徳が一番だと深く感じた。ふざけたところや罵言は結局天地の和を妨げる。私がかつて落ちぶれたのは、平素の口業が招いたのではないか。ただ(『妄妄録』に)記載した話は、実に世間の人々を風刺するつもりはなかった。仮にたまたま卑しい話をして、ちやうど卑しい人の目に映ったら、どうか許して、拔舌地獄を設けて私を待ち受けなくてくれ。私もこれからは、いい加減に聞いていい加減に語り、いい加減な話を記録して人々にいい加減に聞いてくれと望むことは二度としない(21)。

これも「口業債」、「尤太史著伝奇削祿」等と似ていて、知人に口を慎むよう忠告された趣旨の内容である。様々な人に口を慎むよう警告されたということは、朱海は全く反省しなかった可能性が高いだろう。この場合のコメントも「褻経削祿」のコメントのように反省しているように見えると同時に、筆禍を恐れ、予め弁明を行い、「今後このようにいい加減に聞いていい加減に語ることは自粛するので、罪を問わないで欲しい」と言っているようにも見える。

ここまで「因果応報」を主題にした説話を材料に検討を行った。中には「因果応報」による報いの描写に力を入れたいように見えるものと、話の滑稽さが目立つものがあり、筆墨の遊戯として見なせる箇所が多々存在する。また朱海本人のコメントにも、真摯に警告を促すように見えるものと、自身に関連付けて反省するようなものがあった。ただ説話によっては滑稽な部分が目立つ印象が残り、これらの材料では朱海が「因果応報」という主題を意識したようにも見えるが、それよりも笑いを重んじた見方も成立するであろう。

自序によると、書中の説話の由来は、これまで他人から耳にした話が多いようである。確かに書中の説話を見ると、話の提供者が何処の誰であるとか、また自分の親族の誰から聞いた話であるとか、明記しているものが少なくない。また自分で思い出した話の存在にも言及している。しかし、自序からは分からないこととして、他人から聞いた話と自分で思い出した話以外に、他の書物にも収録されていることを明記する説話も収められていることは無視でき

ない。他人から聞いた話や自分で思い出した話とは違い、他の書物にも収められている説話は比較対象が自明である。元の書物での説話の状態と『妄妄録』での説話の状態を比較することは、朱海の志怪観を明らかにする一助となるのではないか。このように考えて、次節で検討を試みる。

三 他の書物から借りた説話について

『妄妄録』の中、他の書物に収録されていることを明記した説話は三則あり、まずは巻十の「殺頭鬼」という説話を確認しよう。

刑部の獄卒だった楊七は山東の人参泥棒と親しかった。(人参泥棒は)悪事がばれて死刑を前に人参で楊七を買収し、更には三十個の元宝を与え自分の頭を縫って納棺してくれと言い含めた。楊七は結局約束を破った。また、人の血を付けた饅頭が肺病に効くことを思い出し、型通りに血を取り、帰って親族に差し出すことにした。

楊七は家に着いた途端、忽ち両手で自分の首を絞めて、大声で「俺の血を返せ、俺の金を返せ」と叫び、間もなく首をへし折って死んだ。袁枚の『新齊諧』もこのことを記録している²²⁾。

説話の末尾から、同じ説話が袁枚の『新齊諧』(以下通称として『子不語』を使用する)にも収録されていることが分かる。『子不語』の場合、この説話は以下の通りである。

刑部の獄卒だった楊七という者は、山東の人参泥棒だった囚某と親しかった。囚は悪事がばれて死刑を前に人参で楊七を買収し、更には三十個の元宝を与え自分の頭を縫って納棺してくれと言い含めた。楊七は結局約束を破った。また、人の血を付けた饅頭が肺病に効くことを思い出し、型通りに血を取り、帰って親族に差し出すこ

とにした。(楊七は)家に着いた途端、忽ち両手で自分の首を絞めて、大声で「俺の血を返せ、俺の金を返せ」と叫んだ。彼の両親と妻と子は紙銭を焼いて、僧侶を招いて助けようとしたが、最後には首をへし折って死んだ²³⁾。

両者を読み比べると、結末以外は全く同じ内容を有していると言える。『子不語』の場合、楊七の家族は紙銭を焼いたり僧侶を招いたりして楊七を助けようとしている。しかし、『妄妄録』の場合はそのような内容がない。『妄妄録』はより簡潔になっていると読めるが、その意図は明らかではない。題名が『子不語』の「還我血」(私の血を返せ)から「殺頭鬼」(首で殺す鬼)に変えられているのは、読者の注意を事件全体よりも鬼の存在に引き付ける意図だったのかもしれない。そう考えると、『妄妄録』は鬼の仕事を印象付けるために家族の動きを省略した可能性がありそうである。一方「因果応報」の主題を明確に提示する意識があるとすると、元の題名「還我血」の方がより確かな印象を与える。「因果応報」に関する戒めを重視したというよりは、鬼に関する描写を要とした書き換えに見える。次に、『妄妄録』巻三の「鬼恋故妻」を見ていきたい。この説話は以下のようなようである。

河間の曹家の一族には鬼が見える老婆がいた。その近所に住む某甲が二十七歳で亡くなった。その妻は老婆に付き添いを求めた。(老婆は)甲がいつも庭の中の丁香の木の下に座り、婦人の笑い声や子供の泣き声、兄と兄嫁が婦人を罵る声を聞いているのを目にした。人の気配に妨げられ近づけられなかったが、必ず耳をそばだてて窓の外からこっそり聞いていて、その痛ましい様子は人々の涙を促すものだった。後に仲人が(婦人に)再婚の話を持ち掛けると、(鬼は)愕然として驚き、手を開いて左右を見回した。(再婚の話が)承諾されないのを聞くと、多少喜ばしげだった。後に仲人が再び来て、婦人、兄、兄嫁と結納の贈り物の話を繰り返して相談すると、(鬼は)駆け回り続け、びくびくして失望しようだった。結納品を納める日、(鬼は)木の下に座り、婦人の部屋を見詰め、涙を零した。それからは、婦人が出入りすれば(鬼は)毎回その後に付き従い、慕い思う気持ち

更に強くなった。再婚の前夜、婦人が嫁入り道具を整理すると、(鬼は)再び部屋の外を徘徊し、時には柱に寄りながら涙を落とし、時には頭を下げて何かを考えるようだった。部屋から少しでも咳の音が聞こえれば、隙間からこっそり覗き、一晩中落ち着かなかつた。老婆はその血迷つたような状態を嘆いたが、(鬼には)聞こえなかつたようだった。再婚の相手が入り、松明を握つて前へ進むと、(鬼は)壁の下に身を退いたが、相変わらず頭を上げて老婆が婦人を送るのを眺めていた。(老婆は鬼が)再婚相手の家まで後を付けたのを目にした。始めは門の神に阻まれたが、(鬼は)ひざまずいて叩頭して、哀願してやっと入れた。(鬼は)壁の隅に隠れ、婦人が再婚の礼を行うのを眺めながら、ほんやりと突つ立つていた。婦人が部屋に入ると、(鬼は)少し窓に近寄り覗き、その様子は婦人が嫁入り道具を整理した時のようだった。(鬼は)灯が消され就寝する時になつても離れず、屋敷神に駆逐されてやつと狼狽しながら出て行つた。翌日、老婆が彼らの子を見に婦人の家に帰ると、(鬼が)涙をたたえながら婦人の寝台を撫でるのを目にした。子が急に母親を捜し求めて泣くのが聞こえると、急いで子供の周りを走り、両手を擦り揉みながらどうしようもない様子だった。暫くして兄嫁が出てきて子供に平手打ちすると、(鬼は)地団駄を踏み、胸を叩いて悔しがり、遠くから歯ざしりをした。老婆はその様子を見て耐えられなかつたので、二度とその家を訪ねることはなく、その後のことは分らない。曹氏は礼部尚書紀昀の母上の氏族で、灤陽銷夏録もその話を載せている(24)。

鬼が見える老婆がいて、その老婆の目線を用いて亡くなった夫が妻と子を愛しく思う様子が描かれた説話であり、この説話も出処は紀昀の『閱微草堂筆記』であると明記している。引用が再び長くなるが、元の説話も左に示す。

亡くなった母親の実家である曹氏には、鬼が見える老婆がいた。祖母が里方に帰つた時、老婆と冥土の話をした。老婆はこう言つた。昨日ある家で一匹の鬼を見たが、どうにもならないほど血迷つていふと言つてよいが、何ともかわいそうだった。鬼の名は某と言ひ、某村に住んでいて、暮らし向きも良く、亡くなつた時は二十七、

八歳だった。死後百日が経ち、(彼の)妻は私に付き添いを求めた。すると(鬼が)ずっと庭の中の丁香の木の下に座り、婦人や子供の泣き声を聞き、兄、兄嫁が婦人と罵り合うのを聞いていたのを目にした。人の気配に妨げられ近づくことはできなかったが、必ず耳をそばだてて窓の外からこっそり聞いていて、痛ましい様子だった。後に仲人が婦人の部屋に来たのを見て、(鬼は)愕然として驚き、手を開いて左右を見回した。その後再婚の話が失敗したのを聞いて、多少喜ばしげだった。後に仲人が再び来て、兄、兄嫁と婦人のところを歩き来ると、(鬼は)ともに駆け回り、びくびくして失望しようだった。結納品を納める日、(鬼は)木の下に座り、婦人の部屋を見詰め、泣いていた。それから、婦人が出入りすれば(鬼は)毎回その後に付き従い、慕い思う気持ちには更に強くなった。再婚の前夜、婦人が嫁入り道具を整理すると、(鬼は)再び部屋の外を徘徊し、時には柱に寄りながら涙を落とし、時には頭を下げて何かを考えるようだった。部屋から少しでも咳の音が聞こえれば、隙間からこっそり覗き、一晩中落ち着かなかつた。私はため息をついて、「血迷った鬼よ、そこまでするに及ばぬ」と言ったが、(鬼は)聞こえなかつたようだった。再婚の相手が入り、松明を握って前へ進むと、(鬼は)壁の下に身を退いたが、相変わらず頭を長くして眺めていた。私は婦人ともに出発して顧みると、(鬼が)遠くから再婚相手の家まで付いてきたのを目にした。門の神に阻まれたが、(鬼は)ひざまずいて叩頭して、哀願してやっと入れた。(鬼は)再婚相手の家に)入ると壁の隅に隠れ、婦人が再婚の礼を行うのを眺めながら、陶酔したように突っ立った。婦人が部屋に入ると、(鬼は)窓に少し近寄り、その様子は婦人が嫁入り道具を整理する時と同じだった。(鬼は)灯が消され就寝する時になつても離れず、屋敷神に駆逐されてやっと狼狽しながら出て行つた。丁度私は婦人に子供を見てくれと頼まれたので、(鬼に)従つて帰つた。(私は鬼が)直に婦人の部屋に入っていくのを見た。婦人が座る場所も寝る場所でも、(鬼は)全て見回した。子供が母親を捜し求めて急に泣いたのを聞くと、(鬼は)急いで子供の周りを取り巻き、両手を擦り揉んで、どうしようもない様子だった。暫くして兄嫁が出てきて子供に平手打ちすると、(鬼は)更に地団駄を踏み、胸を叩いて悔しがり、遠くから歯ぎしりをした。私はその様子を見て耐えられず、直接帰つたのでその後のことは分からない。後に私は婦人

にこの話をした。婦人は齒ぎしりして悔やんだ。里には若くして夫を亡くして再婚を検討する者がいたが、この話を聞いて、「私は亡くなった人がそのような様子になるのは耐えられない」と言い、死も以て（再婚しないことを）誓った。ああ、君子の情義は人に背かない、そして生死によって変わったりもしない。普通の人の情とは、人が生きてれば情はあり、人が亡くなれば情もなくなる。亡くなった者の様子を思うと、実に悲しい。儒者は不誠実な人が神仏に幸福を祈り、邪道が大衆を惑わすのを見て、決して鬼は存在しないという見解を主張した。それは先賢や神霊が教えを設けた深い心を失わせ、愚劣な男女を何も憚らなくなるようにするだけだ。この村里の老婆の言葉が、生死に関して人を感じるのにさえ及ばない⁽²⁵⁾。

両者を読み比べると、話の筋は同様であるが、『閻微草堂筆記』の後半にこの話を聞いた里の婦人が再婚を取り止めたくだりと、紀昀による教訓的なコメントが書かれているのに比べ、『妄妄録』ではこの部分が見当たらない。『閻微草堂筆記』の場合は、鬼がどうこうというよりは、鬼の話の一つの素材として、世の中の人々に警鐘を鳴らすような印象を与える。しかし、『妄妄録』の場合はその警告としてのコメントが存在しないため、鬼に関する描写が印象付けられることになるだろう。説話自体「因果応報」を主題とする話ではないが、元の教訓的なコメントを残さなかったことから、この場合『妄妄録』が道徳的な働きを意識したとは言い難い。一方、『閻微草堂筆記』の場合各説話には題名がないため、『子不語』から借りた説話のように、題名の変化から書き換えの詳細を推測することはできない⁽²⁶⁾。

他に『妄妄録』巻六の「魔餐孽種」も『閻微草堂筆記』から借りた説話である。その内容は前節でも触れた「因果応報」に関するものであり、罪を犯した役人などはあの世で魔に喰らわれる一方、その罪に加担したものも報いを受け、転生しても白痴や盲啞になるといふものである。『閻微草堂筆記』ではこの話は「話は荒唐無稽で、寓話を元にするようだが、神明の道が教化を設け、人々に畏れることを知らせたのも、世人に警告する苦心であり、でたらめだと判断して断つてはならない⁽²⁷⁾」⁽²⁷⁾と言い、話の内容は取り留めもないが、勧善懲悪的な働きは評価している。これに

対して、『妄妄録』の場合は、同じ筋の内容を述べた後、作者自身の話が以下のように付け加えられている。

この話は嘗て宏恩寺の僧侶明心が礼部尚書紀昀に教え、既に灤陽銷夏録に記載され、とりあえず世人に警告する苦心であり、寓話と見なすと言った。この春（私は）天竺山に登り、僧侶の良発にこの話をして、ありやなしや訊ねようとした。私の付き人のこし担ぎの唾の張三という者は階段の下で盗み聞きをしていた。すると彼は突然アーアーウーウーと音を立てながら自分の鼻を指し、手をこまねいて揺れ動き、わざと様々な様子を表した。皆はそれを見て笑いを耐えた。良発は合掌してこう言った、「因果応報が目の前で顕現した。話が寓話であるかどうか探求する必要はない」と⁽²⁸⁾。

元の『閱微草堂筆記』の説話が「因果応報」の主題に関する戒めであることは紀昀のコメントからでも明白である。仮に朱海が十分に「因果応報」を意識し勸善懲悪的な役割を果たそうとした場合、そのコメントを削除する必要はなからう。或いは自身のコメントを書き足すこともできたのであろう。しかし、書き足した部分はそのような役割を果たしておらず、一見「罪に加担したものが転生しても盲啞である」という報いが目の前に現れたような内容ではあるが、こし担ぎの滑稽さの描写に力を入れているように見え、「皆はそれを見て笑いを耐えた」というのもむしろ笑いの要素を加筆しているように見える。そうであれば、やはり勸善懲悪を目的にした書き足しではなく、話をより滑稽に仕上げることを意識した可能性があると思われる。

四 朱海の志怪観について

ここまでは元の話の状態が明白である材料として、前述した他の書物から借りた三つの説話の書き換えから、朱海は読者の注意を「鬼」の存在に引き付けたり、元々勸善懲悪な役割を果たした説話の警告的な部分を削除したり、自

ら笑いの要素を書き足したりしているように見えた。そうである場合、第二節で触れた「因果応報」に関する説話で「所々自ら警告的なコメントを残したのも、一種のポーズとして見なすことが可能であろう。ただ滑稽な話を集め、筆墨の遊戯をするだけでは、結局自序で述べたように「世間から馬鹿にされる」ので、これらのコメントを通して道徳的な方向性を示す役割を果たしたことになるだろう。そういう意味では、朱海は世間に「因果応報」による報いを警告したという葉世倬の評価も単純な弁護ではないのかも知れない。ただこのような後付けした道徳的方向性よりは、どうしても笑いを前提としているので、話の滑稽さが目立つのも必然的であろう。

またこの書物には全体的に話の出処を明記する傾向が見られ、自分はただ見聞した話を記録したという姿勢を示したことは一貫する。第二節で確認した説話では、「因果応報」に関する内容より、話の滑稽さと筆墨の遊戯として目立つ部分はあるが、それが朱海の手による潤色を得ているとは限らない。例外的な例として、巻四の「搗鬼」がある。その内容は以下のようなものである。

仁和（現在浙江省杭州市の一部）の盧曜・字は星斎は冗談話をするのが上手く、私が人に鬼の話をするように強いたのを耳にして、自分は肝つ玉が大きく運も良く、青胖鬼（青くて太ってる鬼）・苦惡鬼（苦しい悪鬼）・齷齪鬼（不潔な鬼）・噉食鬼（大食いに鬼）・縵帶鬼（腰ひもの鬼）・莽癩鬼（無鉄砲な鬼）・尖酸鬼（とげとげしい鬼）・短命鬼（若死の鬼）・火燒鬼（焼かれた鬼）・刀傷鬼（切り傷がついた鬼）・急鬼（焦る鬼）・跳鬼（跳ぶ鬼）・齋鬼（けちな鬼）・臭鬼（臭い鬼）・捉鬼（鬼を捉える）・弄鬼（鬼を弄ぶの）を見たことがあると言い、とくとくと喋って止まらなかつた。盧曜は箸が酒杯の中を自ら搗くのは誰がやったのかと尋ねた。私は「搗鬼」（搗く鬼）と答えた。「搗鬼」とは蘇杭の人が大げさに話す人を風刺する言い方である²⁹⁾。

朱海自身が人に鬼を語られ、その相手をからかう内容である。登場する各種の鬼から、最後の「搗鬼」という表現を用いて相手を皮肉する流れだが、これもまた見事な戯文であろう。話の滑稽さは文末の「搗鬼」の意味に関する注

積によってより昇華される。朱海が如何に筆墨の遊戯に長けているのか、その一端が窺えよう。朱海の手により潤色された話が笑いを意識しているのは確かであろう。仮に他の説話も朱海による潤色を得ているとすると、それらの話の滑稽さが目立つのも、やはり彼が笑いを意識した結果となるだろう。彼にとって「鬼」も古籍の經典も他の志怪書の説話も、ただ戯れる道具に過ぎず、笑いを意識した「戯れ」こそが、彼の志怪観を表す最も適切な表現であるのかも知れない。

おわりに

以上『妄妄録』の序文、「因果応報」に関わる説話、及び他の書物と重複する説話等を材料に朱海の志怪観を考察した。

自序は戯文に見えると同時に、不遇で一生を過ごした朱海の鬱憤が溢れ、この書物は気晴らしとして「鬼」を語ったのだと述べた。また葉世倬による序文はこの書物の道德的な方向性を提示した⁽³⁰⁾。二編の序文からこの書物のキーワードが「鬼」であることは明白であると同時に、「因果応報」を主題として意識した可能性があると考えた。そして実際に「因果応報」を語る内容の説話を絞り、その実態を考察した。その中には「因果応報」による報いを読者に意識させるような警告的な説話とコメントが存在すると同時に、戒めよりは話の滑稽さが目立つものがあることを確認した。そこで更なる手掛かりとして、『妄妄録』が他の書物から借りて潤色した説話に着目し、元の説話との比較を通して、読者の関心をより「鬼」に引き付けようと思わせる書き換えがあり、元の説話の警告的な働きを笑いに交換するような書き換えがあると推測を立てた。また作者である朱海が自らも繰り返し言及した己を戒める話と関連して、彼自身が示す反省の姿勢も、道德的な方向性を示すコメントも、結局は一種のポーズに過ぎないと判断した。朱海が筆墨の遊戯を行ったのも、他人をあげつらったのもただの「妄言妄聽」であり、結局は「いい加減に聞いていい加減に言う」ことをしたのに過ぎず、笑いを求める「戯れ」こそが、彼の志怪観に最も適合する表現であると考える。

た。

このように見なした場合、朱海の志怪観はやはり『子不語』の作者である袁枚を連想させるだろう。志怪に対する観念として、朱海と袁枚の両者はともに「戯れ」を意識し、志怪を娯楽の手段としたのであろう。ただ袁枚の場合には最初から自分の志怪は戯れであり、楽しみだと明言したが、朱海の場合は表向きの弁明を予め多く行い、焦点を「鬼」に絞った上、道徳的な方向性を示すコメントを多数残した。表向きの姿勢は異なるものの、両者の志怪に対する観点、特に「笑い」という話の面白さを重視する側面は類似するので、朱海の志怪観はやはり袁枚の志怪観に親和的であろう。

注

(1) 小論で使用する『妄妄録』のテキストは文物出版社、二〇一五年九月第一版(稀見筆記叢刊)であり、所収説話は十二巻三百二十三話である。他に『続修四庫全書』(二二七〇冊、上海古籍出版社、一九九五年三月第一版)所収、道光十年(一八三〇)刊行、南満州鉄道株式会社図書印付の版も参照したが、こちらの版本は巻十一・十二が欠けている。以下各テキストの句読点は原文にあれば原文に従い、なければ筆者により、その場合は全て句点で統一する。中国語言説の引用は拙訳にて示し、必要に応じて原文を注に挙げる。題名・引用文などの字体は適宜改め、亀甲括弧内は筆者による補足を示す。

(2) 以下周作人の議論を示す(『旧事回想記・二七』、『書房一角』、新民印書館、一九四五年、三八頁)。

偶然『妄妄録』十二冊を購入した。巻頭には王季烈による前書きが「一葉ある……朱海の自序の内容によれば、(朱海は)蘇軾が黄州に左遷された時の故事を真似て、日々に鬼の話をするように強い、決して生計を立てる努力はせず、半年間、でたらめな話をでたらめに聞き、また以前聞いた話を思い出して、手あたり次第で十二巻にまとめて、『妄妄録』と名付けた。神仙の不思議な話は取めず、ただ鬼の話だけを記載した。知識人が不遇であれば、その文章に神がいたとしても、鬼に化けるのにはかならないだろう。王季烈は、それが呉郡の文献であることを重視した。私にとつては、それが専ら鬼を語り、鬼の事情を知りたいものに大いに参考になることが重要であり、この類の資料は探し集めるのが難しいからこそ、貴重である。例えば巻二の「河水鬼」は、溺れた鬼が壺に化けて水面に浮かび、人に(壺を)拾うように仕向け、(人の)指が壺に入るとすぐ引張られ、その時に水から生臭いにおいが漂ったという内容である。また巻三の「溺鬼喜豆」は、武林で一人の男が川で水死

し、その妻が炒めた豆を供物として夫の水死した所に撒いたという話である。(この話も前の話も) いずれも溺れた鬼は炒めた豆を好んで食べるというのも、興味深い。(『妄妄録』)にはこのような記録が多く、どれも善し悪しを見極めて選ぶくらの見どころがある。ただこの書にはふざけたところや罵言も多い。例えば巻三の「鬼公子」は話を捏造して人を罵っているようであり、言及されている汪近涛は即ち江声であり、その江の字は鯨涛であり、文中では彼が「尚書」の研究に専念したと、また手紙や勘定書を書く時は必ず篆書を用いたことを明言している。銭泳に盾突いたという内容は事実かもしれないが、鬼公子にいろいろ侮辱され弄ばれたということについては、作者のでっち上げであるはずで、書きかたからしてもその痕跡が見えると思われる。巻七の「報怨鬼」に至っては、汪中を誹謗するが、名を汪蓉圃に変えており、特に明白である。一九四三年九月二十日。

原文／偶買得妄妄録十二冊，卷首有王季烈題記一葉……案朱氏自序中有云，效坡仙謫黃州時故事，日強人說鬼，絕不作治生計，半年來妄言妄聽，并追憶舊聞，隨筆記十二卷，名曰妄妄錄。神仙詭幻之事不載，唯鬼則記之，蓋士不得志，筆下即有神，亦當化為鬼耳。故王君重其爲吳郡文獻，在不佞則取其專門說鬼，頗足爲慾知鬼之情形者之參考，此類資料蒐集不易，乃爲可貴也。如卷二河水鬼一則，記溺鬼化為罈浮水面，誘人拾取，指入罈口遽被拖住，是時水發腥氣。又卷三溺喜豆鬼一則，言在武林曾見有夫溺于河，妻以炒豆爲祭品，散之溺所，僉言溺鬼喜食炒蚕豆，亦奇。此類記錄尚不少，皆可甄採。唯書中嬉笑怒罵亦多有之，如卷三鬼公子一則似係故意造作以罵人者，所云汪近濤即是江聲，江字鯨濤，文中明言其苦攻尚書，又書小札或購物開賬必用篆字，所記與錢梅溪舫船或係事實，至於受鬼公子種種侮辱，則當是著者所編造，蓋即從文字上亦可以看出痕跡，至卷七之報怨鬼，醜詆汪容甫，但化名爲汪蓉圃，乃尤爲顯明矣。癸未九月二十日。

言及された人物は左に示す。

・王季烈(一八七三—一九五二)、蘇州市出身、中国近代の学者。

・江声(一七二一—一七九九)、字は鯨涛、蘇州市出身、清の儒学者・考証学者。

・銭泳(一七五九—一八四四)、号は梅溪、金匱(現無錫市)出身、清学者・書道家。

・汪中(一七四五—一七九四)、字は容甫、揚州出身、乾嘉学派の一脈・揚州学派の代表人物。

(3) 『妄妄録』に関しては、程章燦「話鬼—『讀書鬼』之二」(『文史知識』、中華書局、一九九九年〇二期)、「鬼怕什麼—『讀書鬼』之四」(『文史知識』、一九九九年〇四期)、「人鬼之間—『讀書鬼』之五」(『文史知識』、一九九九年〇五期)等で鬼に関する説話を収録した例として書名が挙げられ、同氏の『鬼話連篇』(華芸學術出版社、二〇一四年一月初版)で数例の説話を

紹介している。

また「肝冷齋日録」というウェブページでは「守財虜」、「廁中冒声」、「陳雪巖」等二十二則が訳されている (<http://www.mugyubiz-web.jp/nikki/21926sintyosyohun> 二〇一一年九月十二日最終閲覧)。

(4) 葉世偉(一七五二—一八二三)の字は子雲、号は健庵、江蘇省出身、一八二〇年から「按察使銜分巡台湾兵備道」として台湾の地方行政を統括した。『統輿安府志』の編集者であり、『桑蠶須知』等を残している。

(5) 「自序」、前掲『妄妄録』、一頁。

原文／余自家遭中落，三徑就荒，半通難得，毋論市上塵、郭外田，即茂閣萬卷及舜鼎圖書，悉爲有力者奪去。蕭然壁立，抑鬱無聊，日與妻子泣涕牛衣中，了無佳趣。乃題橋斬樞，棄家出門，三五年猶似醴雞雛鷓，依人幕下。方歎頭顱漸老，多病多愁，行將與鬼爲鄰。同學年少，五陵舊遊，亦各鬚鬢華白，金蘭譜變成點鬼簿。不意癸丑冬天復扼我，舟次洙溪，中宵風覆，行裝既罄，榜人厮養斃命者三。狼狽羈旅，手口卒瘡，艱虞潦倒，庚癸頻呼。裹足杭州客舍，偶涉遊想，略談生計，輒遭鬼揶揄之。造化小兒，花拳綉腿，見衣敝履穿，既目爲窮鬼；平胸碗礪，欲奪酒澆，不合時宜，群又譁爲酒鬼。百無奈而詠詩，遣愁境於落莫，言則悽惋，噴噴者更笑爲苦鬼。以堂堂七尺軀，處光天化日之中，貧而非病，人以鬼名，則衆皆唯唯。若一人起而爭之，謂以天涯淪落人，燕市酒人，悲歌慷慨，欽寄歷落人，其不衆相擯爲妄也幾希！以是俠腸血性不敢發，直言讜論不敢吐，功名富貴不敢思，妻孥童僕不敢戀，琴棋詩酒不敢語，填膺憤懣不敢泄。有舌欲言，惟言鬼，斯免鬼之揶揄；與人訊答，亦惟言鬼，斯免求全之毀。因效坡仙謫黃州時故事，日強人說鬼，絕不作治生計。半年來妄言妄聽，并追憶舊聞，隨筆紀十二卷，名曰《妄妄錄》。神仙詭幻之事不載，惟鬼則記之。蓋士不得志，筆下即有神，亦當化爲鬼耳。乾隆甲寅秋九月既望，書於杭州城北之養行樓。吳縣蕉圃朱海。

(6) 未詳。趙翼(一七二七—一八一四)の『檐曝雜記』を指しているとも思われる。

(7) 「序」、前掲『妄妄録』、一頁。
原文／自李唐來，儒者好爲小說，而後世競效之。詠諧談笑，可泣可歌，即神仙鬼怪之事，亦間述焉。曾不知立一說，著一書，非有濟世之苦心，雖工弗尚也。吾友蕉圃先生，丁年遊俠，壯歲登樓。以詩酒作生涯，澆愁腸之碗礪；藉文章爲遊戲，醒俗眼之朦朧。書生命薄，恥與阿堵物爲緣；名士風流，敢以臭皮囊種孽。未了三生公案，惟留一片婆心。爰輯所聞，彙成十二卷，顏曰《妄妄錄》。蓋以嬉笑怒罵之言，寓感發創懲之意。茫茫杳杳，幻即成真；是是非非，參之自透。亦有魍魎魑魅，盡捨慈悲；亦有牛鬼蛇神，時開笑口。其間因果報應，歷歷不爽。何啻生公說法，足使頑石點頭哉！急宜付諸梨棗，以廣傳聞。指彼岸之可

登、識改圖之非晚。勿謂妄妄之談、與稗官曝驚聞話同類而共列之也。是爲序。道光二年夏日撫閩使者鄉同學弟葉世倬拜撰。

- (8) 「種孽」や「嬉笑怒罵之言」は周作人が批判したこの書物の「ふざけたところや罵言が多く、人を罵るために捏造した話がある」部分に關係するだろう。ただ同じ「嬉笑怒罵之言」という表現ではあるが、周作人は否定的な意義で提示しているが、葉世倬の場合は肯定的な意義で提示していると思われる。

- (9) 「討命鬼」、前掲『妄妄録』、一八頁。

原文／吁、財命相連、臨財豈可苟得哉！

- (10) 「口業債」、前掲『妄妄録』、三三頁。

原文／太史舉此、蓋以巽言戒我口業也、乃未克守口如瓶、時或不能忍俊、奈之何哉！

- (11) 「借軀託生」、前掲『妄妄録』、六四頁。

原文／福建南平諸生姚格亭學信爲余言。吁、結怨施恩、皆人自作、一念之悔、遂使已絶之嗣復續。討債兒去、還債兒來、即在一身。借因結果、善惡之報捷於影響、信夫！

- (12) 「果業報心」、前掲『妄妄録』、七六頁。

原文／果業之報、雖昆蟲鳥獸、亦有鬼索命。《文帝陰鷲文》救蟻中狀元之選、又云舉步常看蟲蟻、能不慎之？因憶余童時、每惡蚊聚如雷、日以松香末燃火燎之、死以萬計。恐福祿削盡、尚有餘愆。今日潦倒坎坷、已從末減、殆將何以懺悔！

最後の「末減」の二文字は今回のテキストでは「未減」となっていて、意味が分からない。『続修四庫全書』のテキストを参考に、「未減」に改めた。

- (13) 「兄敗弟奸」、前掲『妄妄録』、九三頁。

原文／人之隱匿、鬼神無不知之、可不懼哉。

- (14) 『孟子注疏』卷九、『四庫全書』卷一九五、上海古籍出版社、一九八七年六月版、三二頁。

原文／彌子瑕之妻與子路之妻兄弟也。

- (15) 「尤太史著伝奇剖祿」、前掲『妄妄録』、一二七頁。

原文／「……以西堂太史之根器才德、猶未免於潦倒北平、子孫不振、吾曹可不畏哉！」追憶藥言、願同人共識。
・彭希涑（一七六一～一七九三）、字は樂園、号は蘭臺、長洲（現蘇州市）出身、清の拳人・仏教徒。
・尤侗（二六一八～一七〇四）、字は同人、展成、晩年は西堂老人と号した。長洲出身、清初の文学者。

(16) 「鬼仇計私」、前掲『妄妄錄』、一六九頁。

原文／夫竊談閻閻，已傷陰德，況鄰婦有姦，並非親屬應執，遽以不干己事，致伯仁由我而死，是誠何心！遭遊魂為厲，殆其自作之孽也。

(17) 「溺器上觀書削祿」、前掲『妄妄錄』、一九四頁。

原文／余每觀書至不忍釋卷，適下急，亦攜登溺器。不知福命如何，能免削盡餘愆否，為之惴惴。

(18) 「陰惡墮犬」、前掲『妄妄錄』、一九六頁。

原文／吁！遲矣晚矣。耳未豎生，毛未戢體，何不思遷善也。

(19) 「悍婦孽報」、前掲『妄妄錄』、二二二頁。

原文／嗟夫，死墮畜道，故惡不悛，卒不免於屠割之慘，可不悔懼！

(20) 「藜絰削祿」、前掲『妄妄錄』、二四二頁。

原文／哀哉！藜瀆聖經，冥罰如此之重！余於童年曾集四書句戲作男女居室題文，即此罪案，其隕越先緒，千里飄蓬，艱苦備嘗，坎坷不偶，功名惟送人作郡，家計則假貸為生，豈非孽由自作？尚有目不識丁之子，殆猶祖父之澤，不斬其嗣歟？悔及噬臍，向隅一哭。

(21) 「良友規箴」、前掲『妄妄錄』、二六四頁。

原文／前輩張瞻園梓，上海名士，能百家書，其漢隸專攻《曹全碑》，尤為世重。早歲嘗著《齊東野語筆記》、《衢談巷說》。一日他出，忽有舊雨李縮章踵門候問，直達書室，於其所著書面頁題曰：「借譚果報，勿事罵人。拔舌地獄，君子懷刑。」即飄忽而去。時縮章墓木已拱。歸家，僕以所題故白，大駭，而視墨痕慘淡。筆跡宛然，知良友有以規之。因念雖據耳食載錄，恐造無心口業，遂焚其稿。余與張氏先世為中表，令子謹堂默尤莫逆。聞余作《妄妄錄》，書前事相戒，足初愛人以德也。夫嬉笑怒罵，終傷天地之和，余淪落至此，安知非平生口業所召？第所記錄，其實不敢譏刺時流，倘偶言矮話，恰遇矮人，幸為諒之，勿設拔舌獄待我。余於此亦不復妄聽妄言，記妄言望人妄聽矣。

(22) 「殺頭鬼」、前掲『妄妄錄』、二二四頁。

原文／刑部獄卒楊七，與山東偷參者善，事發，臨刑，以人參賂楊，又與三十金，囑其縫頭棺殮。楊竟負約，且記人血蘸饅頭可醫瘡癩，遂如法取血，歸奉其戚。楊七甫抵家，忽兩手扼其喉大叫：「還我血，還我銀！」頃刻喉斷而死。袁簡齋太史《續齊諧》亦記此事。

(23) 「還我血」、『新齊諧』卷十八、前掲『続修四庫全書』一七八八冊、八七七頁。

原文／刑部獄卒楊七者。與山東偷卒囚某相善。囚事發。臨刑以人參賂楊。又與三十金囑其縫頭棺殮。楊竟負約。又記人血蘸鐵頭可醫瘵疾。遂如法取血。歸奉其戚某。甫抵家。忽以兩手自扼其喉。大叫還我血。還我銀。其父母妻子燒紙錢。延僧護救之。卒喉斷而死。

(24) 「鬼恋故妻」、前掲『妄妄錄』、六三三頁。

原文／河間曹氏有媪能視鬼。其鄰某甲、年二十七而死。其婦邀媪相伴。見甲恒坐院中丁香樹下。或聞婦笑聲、兒啼聲、兒嫂與婦詬評聲、雖陽氣逼燦。不能近。必側耳窗外竊聽。悽愴之色。令人見而隕涕。後有媒妁來議婦再醮。愕然而驚。張手左右顧。迫聞議不成。稍有喜色。既而媒妁再至。與婦及兒嫂往返議聘。則奔走不迭。皇皇如有失。送聘之日。坐樹下直視婦房。溘溘雨淚。自是婦每出入。輒隨其後。眷戀之意更篤。嫁前一夕。婦整束奩具。復徘徊簷外。或倚柱泣。或俯首若有思。稍聞房內嗽聲。輒從隙私窺。營營竟夜。媪歎其癡。若弗聞也。迨娶者入。乘火前行。避立墻下。仍翹首望媪送婦去。見又尾隨至娶者家。初為門尉所阻。稽顙哀乞而入。匿墻隅。望婦行禮。凝立如醉。婦入房。從窗窺伺。其狀一如裝束奩具時。至滅燭就寢。尚不去。為中霽神所驅。乃狼狽出。次日媪返至婦家。視其孤兒。見鬼以婦坐眠處含淚遍撫。俄聞兒索母啼。趨繞兒走。以兩手相搓作無可奈何狀。少頃嫂出撻兒一掌。便頓足拊心。遙作切齒。媪見其情不忍。遂不復至其家。未知後何如也。曹氏為紀曉嵐大宗伯先太夫人外家。《灤陽銷夏錄》亦載其事。

(25) 「閻微草堂筆記」卷四、前掲『続修四庫全書』一二六九冊、四八頁。

原文／先太夫人外家曹氏。有媪能視鬼。外祖母歸寧時。與論冥事。媪曰。昨于某家見一鬼。可謂痴絕。然情狀可憐。亦使人心脾悽動。鬼名某。住某村。家亦小康。死時年二十七。初死百日後。婦邀我相伴。見其恆坐院中丁香樹下。或聞婦哭聲。或聞兒啼聲。或聞兒嫂與婦詬評聲。雖陽氣逼燦不能近。然必側耳窗外竊聽。悽慘之色可掬。後見媒妁至婦房。愕然驚起。張手左右顧。後聞議不成。稍有喜色。既而媒妁再至。來往兒嫂與婦處。則奔走隨之。皇皇如有失。送聘之日坐樹下。目直視婦房。溘溘涕如雨。自是婦每出入。輒隨其後。眷戀之意更篤。嫁前一夕。婦整束奩具。復徘徊簷外。或倚柱泣。或俯首如有思。稍聞房內嗽聲。輒從隙私窺。營營者徹夜。吾太息曰。痴鬼何必如是。若弗聞也。娶者入。乘火前行。避立墻隅。仍翹首望媪。吾偕媪出回顧。見其遠隨至娶者家。為門尉所阻。稽顙哀乞乃得入。入則匿墻隅。望婦行禮。凝立如醉狀。婦入房。稍稍近窓。其狀一如整束奩具時。至滅燭就寢尚不去。為中霽神所驅。乃狼狽出。時吾以婦囑歸視兒。亦隨之返。見其直入婦室。凡婦所坐處。眠處。一一視到。俄聞兒索母啼。趨出環繞兒四周。以兩手相搓。作無可奈何狀。俄嫂出。撻兒一掌。便頓足拊心。遙作切齒狀。

吾視之不忍。乃逕歸。不知其後何如也。後吾私爲婦述。婦齧齒自悔。里有少寡議嫁者。聞是事。以死自誓曰。吾不忍使亡者作是狀。嗟乎。君子義不負人。亦不以生死有異也。常人之情。則人在而情在。人亡而情亡耳。苟一念死者之情狀。未嘗不戚然感也。儒者見詔賣之求福。妖妄之滋惑。遂斷斷持無鬼之論。失先王神道設教之深心。徒使愚夫愚婦。悍然一無所顧忌。尚不如此。里嫗之言。爲動人生死之感也。

(26) ところでこの説話は「痴鬼恋妻」という説話として『統子不語』巻五にも収録されている。『統子不語』の場合、紀昀の母方の里の話が都の話になったり、老婆の目線で語るはずの説話が、途中で第一人称・第三人称が混同したりしている。そして紀昀による教訓的なコメントの部分は見当たらない。袁枚が『閔微草堂筆記』から説話を改竄して載せたことは明白であろう。『妄妄録』はこの話を『閔微草堂筆記』から直接借りて、『統子不語』による、一度手の加わった内容を元に書き写した可能性は低いと考えてよからう。

(27) 『閔微草堂筆記』巻六、前掲『統修四庫全書』一二六九冊、七四頁。

原文／雖語頗荒誕。似出寓言。然神道設教。使人知畏。亦警示之苦心。未可繩以妄語戒也。

(28) 『魔餐孽種』、前掲『妄妄録』、一〇八頁。

原文／此事宏恩寺僧明心嘗先告曉風大宗伯。已紀《灤陽銷夏録》。猶謂是警世苦心。聊作寓言。今春登天竺。與僧良發談前事。將訊其有無。余從一轎夫名啞張三者。在階下竊聽。忽啞啞啞。自指其鼻。復拱手搖擺。作態萬狀。眾為之飲笑。良發合掌曰：「果報現前。不必究其寓言與否。」

(29) 『搗鬼』、前掲『妄妄録』、八三頁。

原文／仁和盧星齋曜。善談諧。聽余強人説鬼。有自矜胆大福大。曾見青胖鬼、苦惡鬼、齷齪鬼、噉食鬼、縉帶鬼、莽鬚鬼、尖酸鬼、短命鬼、火燒鬼、刀傷鬼、急鬼、跳鬼、齎鬼、臭鬼、捉鬼、弄鬼、津津不已。星齋以箸在酒杯空搗。問何為。答曰：「搗鬼。」搗鬼。蘇杭人譏誇談之謂。

(30) 『妄妄録』の最後に道光甲申（一八二四）年兪克承という人物による跋文があり、対句を用いて作者である朱海を褒め称え、この書物を高評している。ただ称賛の言葉を並べただけで、卓見とは関係性が稀薄であるため省略する。